



効果的不登校対策とは・・・？

夏休みが終わると、学校を休みがちな子どもが一気に増加する傾向にあります。

霧島市では、1学期に長期欠席した児童、生徒の総数より、この2学期の始業式を欠席した児童、生徒数が上回っていたそうです。当然のことながら、「始業式当日に欠席した子＝不登校傾向にある子」ではありません。

しかし、始業式当日は何とか出席しても、しだいに学校に来られなくなる子が増えてくるのが一般的。したがって、2学期以降の不登校等の長期欠席者が1学期より格段に増えてくる可能性が高いことを示唆しています。



当センターに寄せられる相談も不登校関連が多いのですが、不登校に陥る子どもたちの多くには、ある共通点が指摘されています。それは、「自己有用感が低い」点だそうです。「自分にはいいところが一つもない」「自分は役立たずだ」「何をやってもダメな子だ」・・・のような自己否定感の強い子ほど、打たれ弱く、些細なことで学校に行けなくなる傾向が強いです。そのことを裏付けるかのように、不登校治療で大きな成果をあげている実践家の方々は、「良いところを認め、自信の水で子どもの心を満たしてあげる」とか「役割を与え、感謝の言葉を伝える」や「足りない点に目を向けず、その子の頑張りや良くなった点だけに目を向け、それを具体的にほめる」・・・等、それぞれ表現は異なりますが、心にエネルギーを注ぎ込むことが不登校対応のキーポイントであり、不登校防止にもつながると主張されておられます。

戦後間もない貧しい時期に育った子たちは、なぜ不登校にならなかったのか・・・？そこにもヒントがありそうです。炊飯、食器洗い、幼い弟妹の世話、風呂の準備、洗濯、家畜の世話、掃除、・・・等、当時の子どもには任される家事が多くありました。

その役割を果たすことで自己有用感を自ずと感ずることができ、家族からの「助かったよ、ありがとう」の言葉を聞く機会も多かったような気がします。



子どもが不登校に陥ると、つい原因を追究しようとしてしましますが、それは解決につながりません。

家庭でも学校でも、子どもに役割を与え、「上手にできたね」「ありがとう」「おかげで助かったよ」等の称賛や感謝の言葉を伝えることが、何よりも不登校対策に効果があり、未然防止にもつながります。

なお、2017年に制定された教育機会確保法では、不登校の児童、生徒にも教育の機会を与えることが定められ、学校以外の支援センターやフリースクール等も学びの場として正式に認められました。明治大学の諸富祥彦教授は、「学校以外の適応指導教室等に毎日通っていた子は、中学校卒業後、高校に毎日通っている子が多い」と述べられています。本市にも「国分支援センター」「隼人支援センター」等の学校以外の学びの場があります。学校にどうしても通えない場合は、選択肢の一つに加えていただきたいと思います。